

橘湾で見られたトゲアメフラシについて

清 本 節 夫

「アメフラシ」と聞いても分からない人でも、春に潮の引いた海岸にいて、触ると紫色の液を出す“うみうし”と言われると姿を思い浮かべる人も多いと思う。見た目では想像できないが、歴とした巻貝の仲間で体の中に殻を持っている。さて、ここで紹介しようとしているのは、そのアメフラシの近縁種で大きくなると殻もなくなってしまう「トゲアメフラシ」である。その姿は写真1のように、背面が樹枝状の柔らかい突起に覆われており、その間には一目見ると忘れられない青い斑点が散らばっている。

筆者らは1990年から橘湾奥でクロアワビとムラサキウニの調査を行っていたが、1991年11月に突然この見慣れない動物を大量に見ることとなった。多いところでは50cm×50cmの枠の中にトゲアメフラシが17個体も見つかり、石を返すと小型のトゲアメフラシが舞い上がる状態だった(写真2)。91年秋といえば、長崎県下に大きな被害をもたらした台風19号が通過した直後であり、調査地の海岸でも大きな石が打ち上げられたり、護岸が崩れたりした。また、海底で見られる生物の種類も量もそれまでとは大きく変化していた。その後、翌92年2月までは同様の枠取り調査で確認されたが、それ以降ほとんど見ることはなかった(図1)。図2にこの時に枠取り調査で採集されたトゲアメフラシの湿重量の組成を示した。当初20以下と小さいものが多かったが12月には20以上のものも見られ、2月になると再び15~20の個体が主となった。この調査の時に船を出してもらっていた人は、底曳き網もやっていたのだが、網を曳くとこれがたくさん入って困ると言っていたのを覚えている。



写真1．トゲアメフラシ

その後、この調査地ではほとんど見ることもなかったトゲアメフラシであったが、資源増殖部魚類増殖研究室(当時)の興石室長から、島原半島南西部の橘湾岸で行っているヒラメの調査で、今年(1998年)の夏にトゲアメフラシが桁網に入ったと聞いた。興石室長の話では、少なくとも4・5年前から、特に夏場に見られていたが、この夏は多いときで一網で100個体近く入り、斑点が青いものだけでなく、ピンクのものもいるということだった。9月に漁獲効率調査の手伝いで同行したときには、水中カメラ越しにトゲアメフラシの姿を見ることはできたが、実物を見ることはできなかったため、ピンクの個体は確認できなかった。12月の調査に同行したときには、桁網の採集物の中にトゲアメフラシの影も形もなかった。

アメフラシの異常発生と言えば、筆者の入所前であるが、1988年春先に島原市地先でアマクサアメフラシが異常発生し、養殖ワカメに大きな被害が出て、漁協・長崎県による駆除が行われている(加藤・近藤1989)。この報告の中で、1982年から当時までのアマクサアメフラシに関する文献は9件あったと書かれている。そこで、トゲアメフラシについても検索してみた。意外にも1980年以降で13の文献があることが分かった(この検索は、農林水産研究情報センターのBIOSISおよびASFAにより行った)。この中には人工海水での飼育からミオグロピンのアミノ酸配列、さらには紫外線の影響に関するものまであった。このうち、人工海水での飼育に関して、Paige(1988)は、トゲアメフラシの4つの亜種の

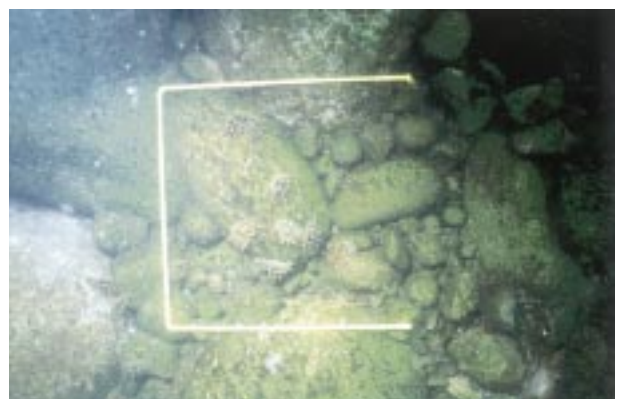


写真2．枠取りの様子。黄色の枠が50cm×50cm。